

Ⅲ 越後山遺跡第6次調査

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査の対象となった地点は、和光市南1丁目2457-1、2458-1である。土地所有者から平成17年1月16日付で和光市教育委員会に対し宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出された。これを受け、市教育委員会は同年1月25日に試掘確認調査を実施した（第93図）。

調査の結果、住居跡と見られる遺構が確認されたため、土地所有者と市は遺跡の保存に関する協議を行った。しかし、現状保存は困難であるとの結論に至ったため、本発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになった。本発掘調査は、和光市遺跡調査会が土地所有者から委託を受けて行った。

調査は建設予定範囲約2200㎡のうち、試掘確認調査で遺構が確認された範囲のみを対象としたため、本調査実施面積は約29㎡である。

発掘調査は平成24年17年4月5日～同年4月8日まで実施した。

2. 調査方法と発掘経過

確認調査で遺構が確認された部分以外は著しく攪乱されていた。そのため遺構が確認された範囲のみを調査対象とし、調査区を設定した。

調査は平成17年4月5日から開始した。始めに重機により表土を剥ぎ、その後人力によって遺構の掘り下げを行った。測量は任意の測量点を設置し、平板により遺構実測・全体図の測量を行い、同年4月8日をもって現地調査を完了した。

3. 検出された遺構と遺物

(1) 古墳時代

住居跡

第26号住居跡（第95・96図、写真図版44）

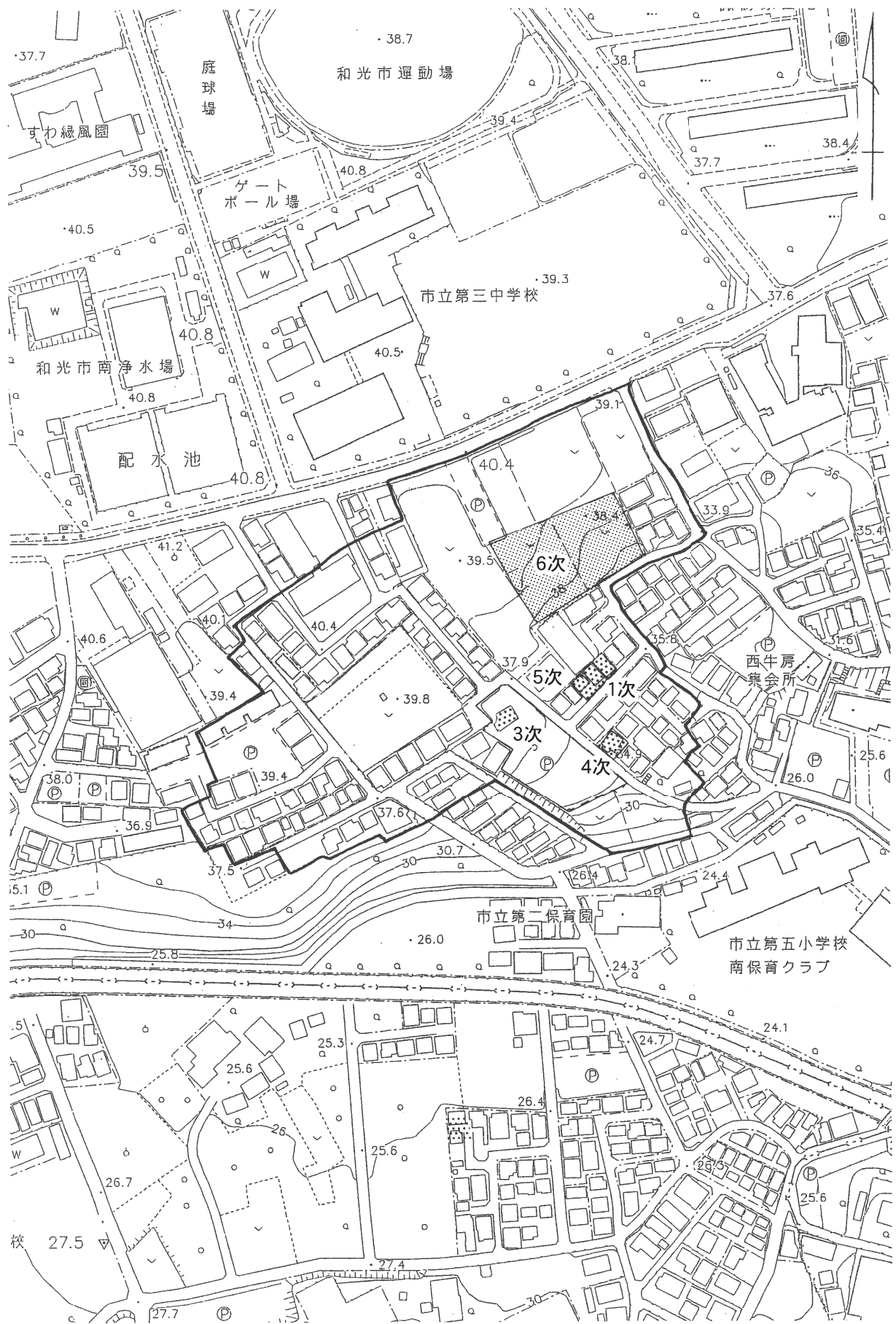
位置 調査区西側のK・L-22・23グリッドから検出された。なお、遺構の西側は未調査区に当たる。

遺存状態 遺構の西側を近世以降と思われる区画溝に切られていることに加え、遺構上面は攪乱を受けており遺存状態は良くない。

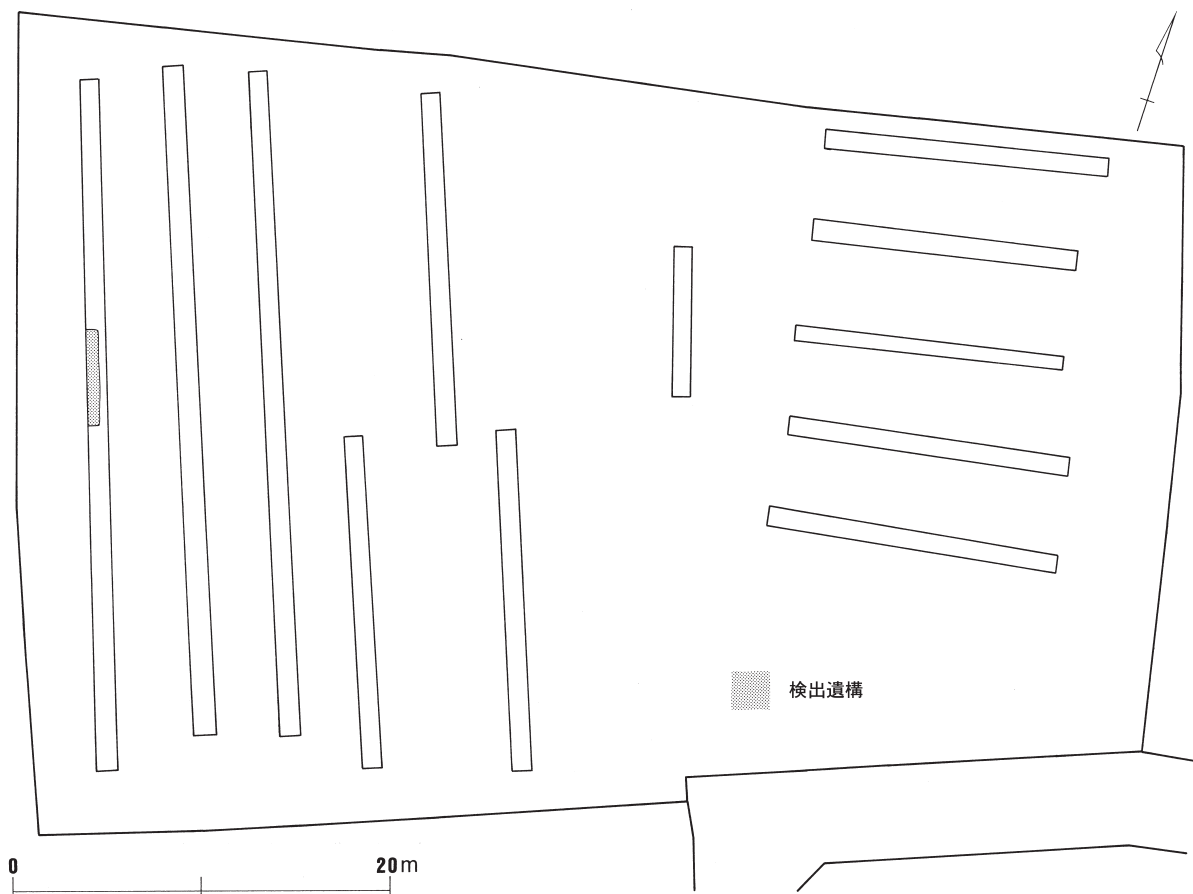
形状・規模 遺構の西側を区画溝に切られており、規模は判然としないが、検出できた範囲では一辺4.6m前後を測る。平面形態は概ね隅丸正方形を呈するものと推定され、主軸方位はN-16°-Wを示す。削平が著しく、確認面から床面までの残存壁高は、北側壁面、南側壁面ともにおおむね5cm程度を測る。

覆土 2層に分けた。1層が竪穴覆土、2層が貼床ならびに掘り方の埋め戻し土である。

第1層 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。



第92図 越後山遺跡（第6次）調査位置図（S = 1/2500）



第93図 試掘調査トレンチ配置図 (S = 1/200)

第2層 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。

柱穴 主柱穴は認められず、南壁寄りに出入り口関連施設として、斜行ピットが1基検出された (P1)。規模は径55cm×60cm、深さ38cmを測る。柱穴は掘り方を含め1基のみの検出であるため、配列関係は不明である。

周溝 住居の掘り方から周溝と思われる遺構が検出された。検出できたのは住居の東部と南部の一部である。周溝から壁面までやや距離があることを踏まえると、この住居は拡張されている可能性が指摘でき、検出された周溝は拡張以前の住居規模を示していると推定される。

貯蔵穴 住居の南東部の位置に掘り込まれている (P2)。規模は径57cm×45cm前後、深さ63cmを測り、その規模と形状から貯蔵穴と推定した。覆土中からは後述する壺形土器片が出土している。

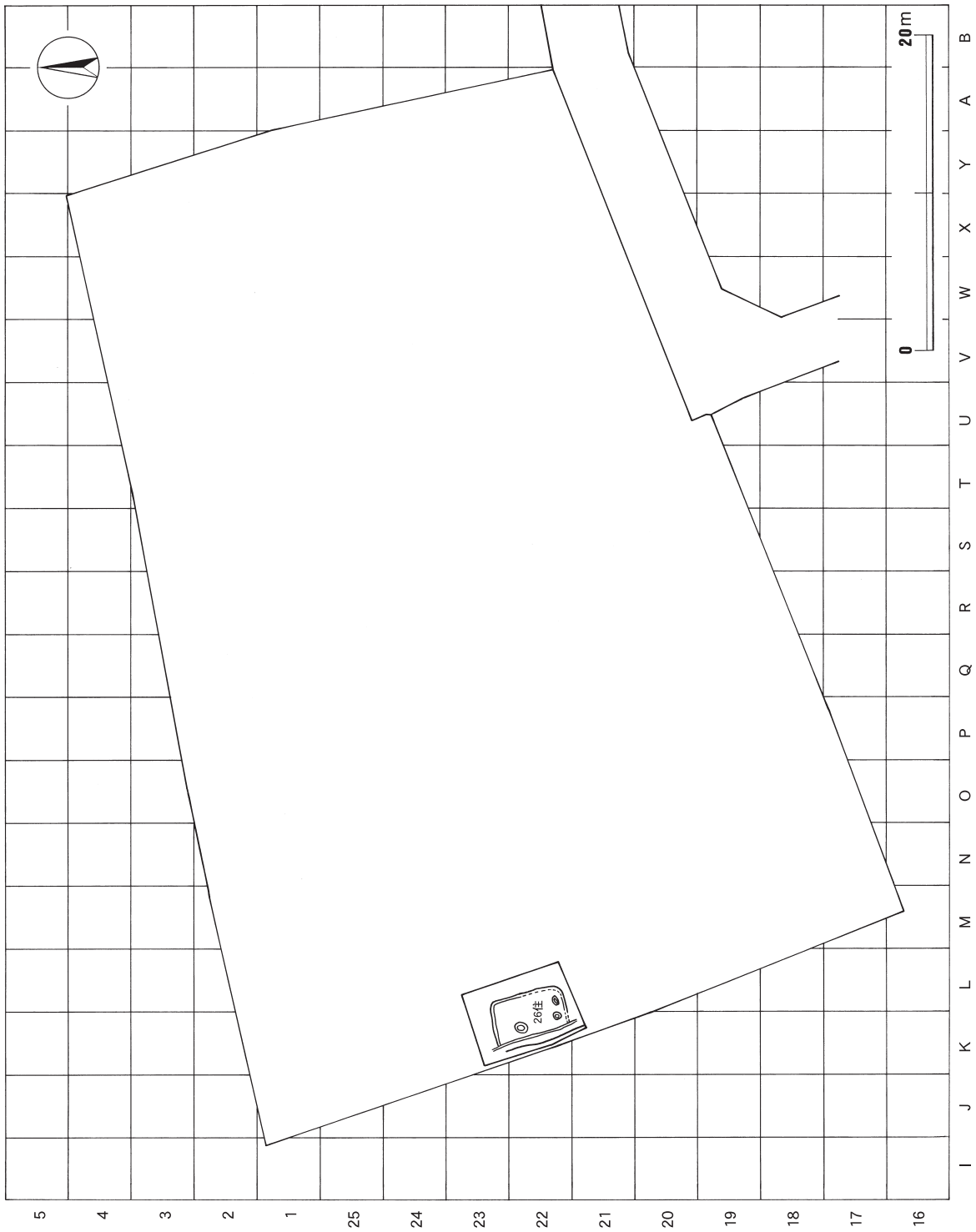
炉跡 床面中央のやや北側で検出された。地床炉で、規模は径78cm×70cm前後を測る。火床面は被熱しており、赤化、硬化が認められた。覆土は3層に分層した。

第1層 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。(色調暗め)

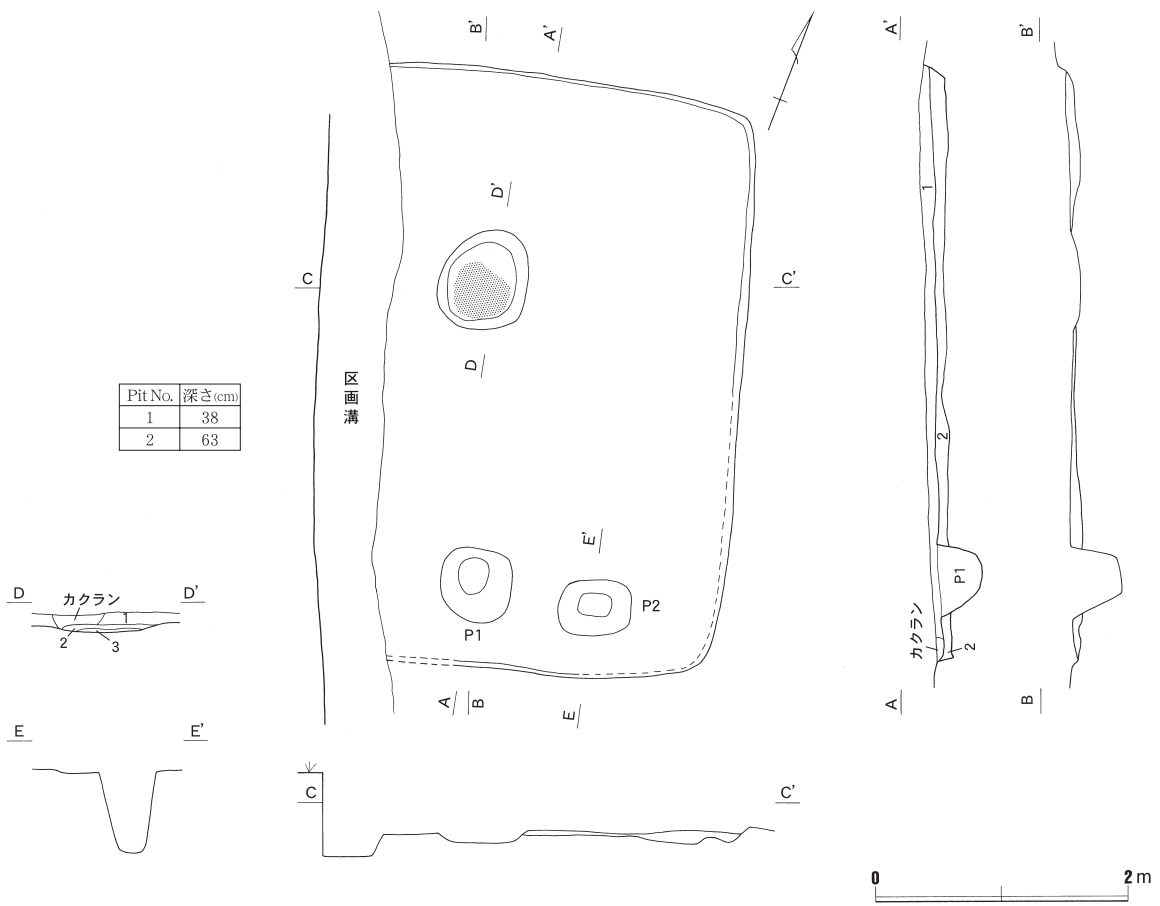
第2層 黒褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。

第3層 暗赤褐色土 焼土粒を多量、炭化物を少量、被熱したロームブロックを若干含む。

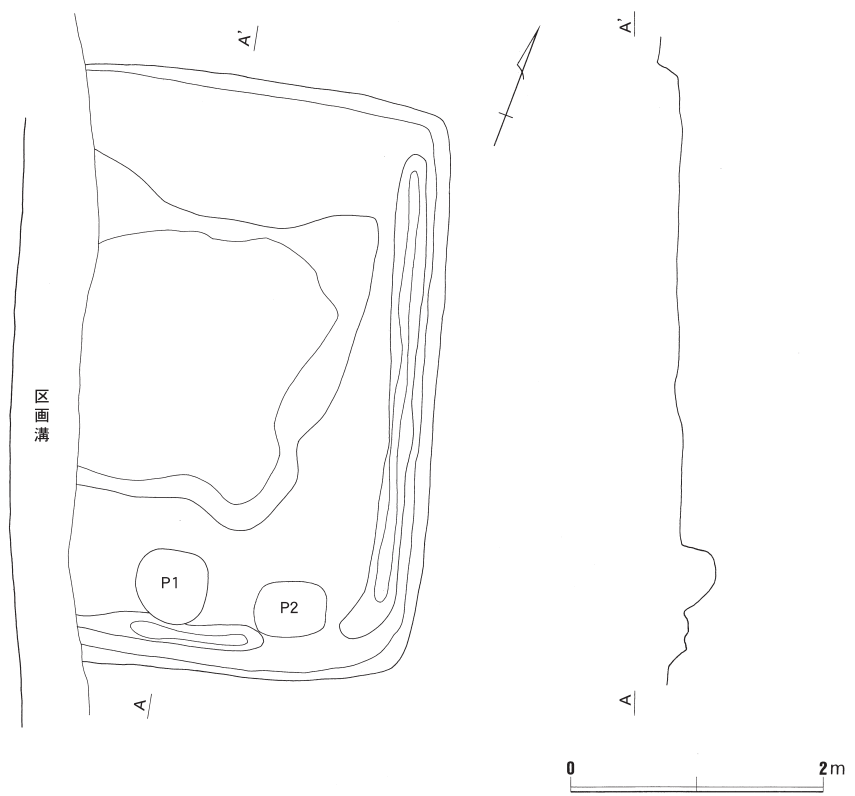
時期 出土した土器の器形・文様等は古墳時代初頭～前期の様相を示していることや住居



第94図 第6次調査遺構全体配置図



第95図 第26号住居跡平・断面図 (L = 38.5m)



第96図 第26号住居跡掘り方平・断面図 (L = 38.5m)

の形態から、本住居跡の時期は古墳時代初頭～前期頃に該当するものと考えられる。

出土遺物（第97図、写真図版45）

第26号住居跡から出土した遺物は全て土器で、微細な小破片、混じりこみを含め総数90点である。ここではその内、本遺構の主体と思われる土器で、実測可能なものを中心に7点を図示した。5と6は貯蔵穴からの出土であり、それ以外は住居の覆土中からの出土である。

土器（第97図1～7）

壺形土器（1・3・5）

1は壺形土器の口縁の一部である。口縁は折り返されており、折り返し部外面には横位のハケとナデが施され、内面は横位のナデと縦位のミガキが見られる。頸部には斜位のハケが施されている。推定口径はおおむね17cm程度を測る。3と5は底部片である。3の外面は赤色に彩色されている。5は外面に縦位のミガキが施され、内面は風化が著しい。

埴形土器（2）

埴形土器の破片である。外面は無文であり、内面は横方向にナデが施される。うすい褐色を呈する。

器台形土器（4）

器台形土器の脚部である。周囲には焼成前穿孔された四方透かしが確認できるほか、器台の上部から下部にかけて中心が焼成前穿孔されている。

甕形土器（6）

甕形土器の底部片である。褐色を呈し、比較的厚みがある。外面は縦位のハケが施され、内面は風化が著しい。

台付甕形土器（7）

台付甕形土器の脚部である。外面には横位のナデと縦位のハケが施されている。

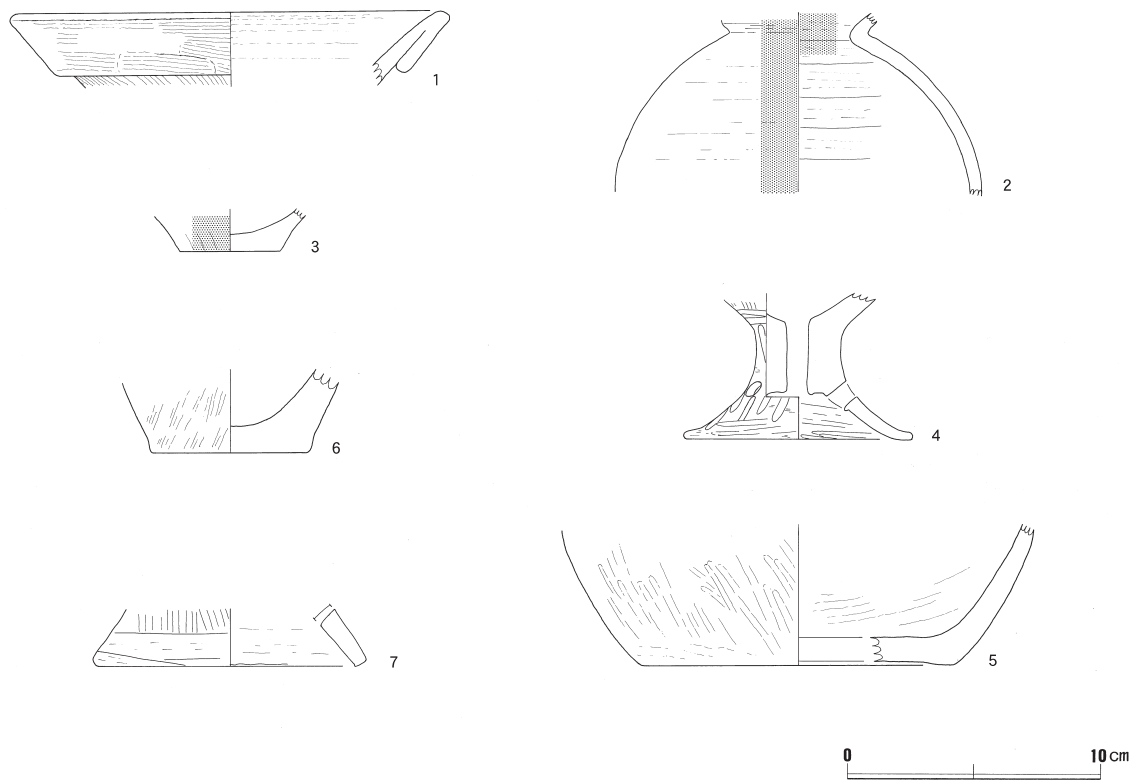
（2）調査区出土遺物

ここでは遺構外遺物を中心に、明らかに時期の異なる遺構から出土した遺物を調査区出土遺物として扱い報告する。図示した遺物は全て縄文土器である。

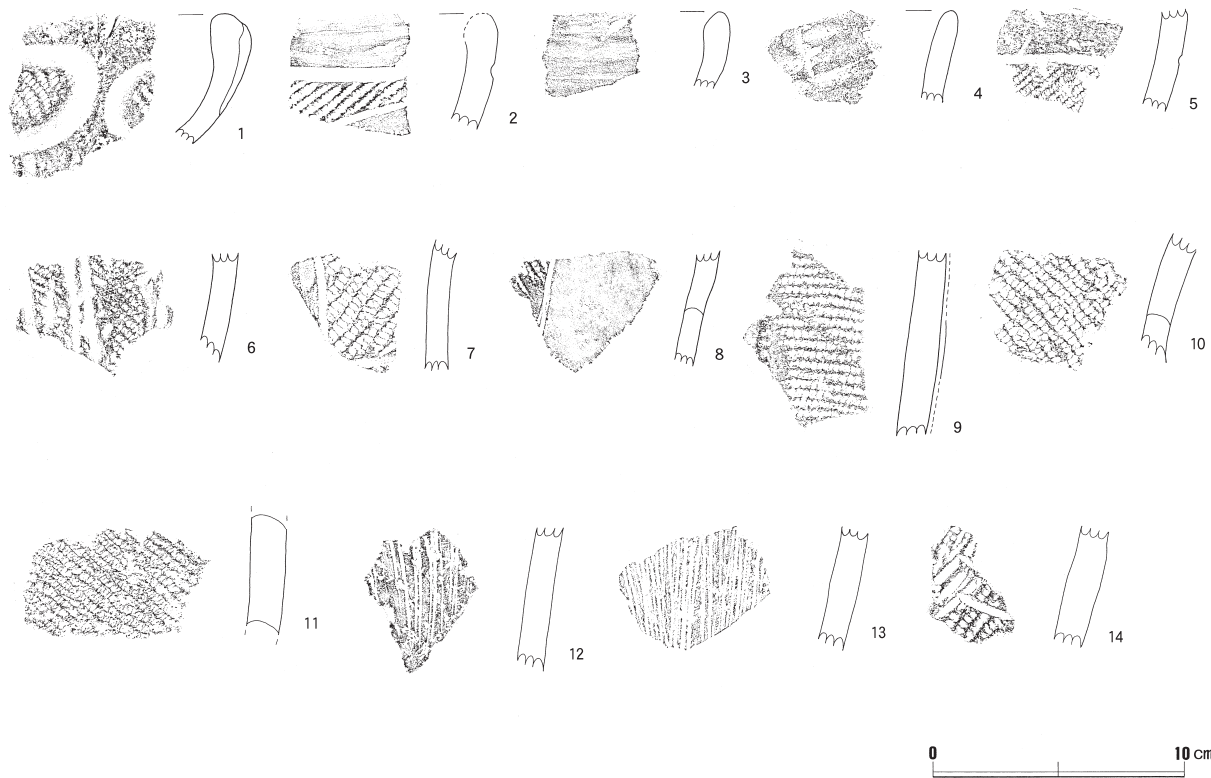
土器（第98図1～14、写真図版45）

1～4は深鉢の口縁部破片である。1は内弯する口縁部で、口縁部文様に隆帯による横位楕円区画が作出されるものと思われる。区画内は単節LR縄文が斜位に施される。2は横位の2本沈線間に単節LR縄文が充填される。3・4は無文で、4は波状口縁を呈する。5～14は深鉢の胴部破片である。5は横位に沈線が配され、区画内が磨消されている。6は半截竹管の腹による平行沈線が垂下する。7・8は細沈線で文様が描出される土器で、地文は7が単節LR、8が単節LR縄文である。9は胴部が断面三角微隆起帯で従位区画され、区画内に単節LR縄文が充填される。10・11は縄文、12・13は条線のみ施文されている。14は縄文地上に棒状工具による「ハ」の字状文が粗雑に施されている。

以上の土器は、2が縄文時代後期、4が前期、他は中期後半と思われる。（中岡貴裕）



第97図 第26号住居跡出土遺物



第98図 調査区出土遺物

IV 小 結

今回の第2・6次調査は遺跡西寄りの台地平坦部とやや北東側に奥まった台地緩斜面部で実施された。その結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の各時期の遺構・遺物と遺構の検出には至らなかったが近世以降の遺物を少量検出できた。以下、各時期の成果内容を時期ごとに記すが縄文時代中期の土器の細別時期及び編年的位置づけは新地平編年（小林謙一、中山真治、黒尾和久2004）^(註1) に準拠し行った。

1. 旧石器時代

旧石器時代の調査では、15箇所試掘坑を設定して確認調査を行った。その結果、Ⅲ層下位からⅣ層中位にかけて礫群1基、石器集中ブロック1ヶ所が検出された。石器は石核、二次調整剥片、使用痕のある剥片、剥片など計33点が出土した。今回定形石器の出土は認められなかったが、包含層以外の調査区出土遺物では該期の尖頭器、ナイフ形石器等の出土が確認されており今後の調査では注意が必要である。

2. 縄文時代

縄文時代の調査では、竪穴住居跡9軒、土坑62基（埋設土器土坑3基を含む）、ピット49基が検出された。住居跡の時期は、出土土器から第7・24号住居跡が加曽利E1式期（10b期・10c期）、第10号住居跡が加曽利E2式期（11c2期）、第8・9・11・13号住居跡・第25号住居跡が加曽利E3式期（12b期・12c期）、第12号住居跡が加曽利E4式期（13a期）に比定される。各住居の調査区における位置関係（第12図）は、第7号住居跡が調査区北東側、第24号住居跡が調査区南西側、第10号住居跡が調査区中央やや西寄りに位置し、その外側に後半期の6軒が一部近接して分布している。住居形状は全形が窺える3軒（第7・8・10号住居跡）では第7号住居跡が隅丸方形、第8・10号住居跡がほぼ円形を呈し、第7号住居跡は同心円状に2回の拡張が認められた。炉跡は地床炉・石囲炉・埋甕炉が認められ、未検出の第25号住居跡は不明だが第7・10・12号住居跡が埋甕炉、第13号住居跡が石囲炉、他は地床炉で第7・8・10・13号住居跡では炉跡の付け替えが確認された。周溝は7号住居跡のみ認められた。住居埋甕は第12・13・25号住居跡の3軒で認められ、第13号住居跡では入れ子状に2個体確認された。

埋設土器土坑3基は加曽利E4式期（13b期）に位置づけられるもので第1号土坑が調査区北側T-10グリッド、第8号土坑がP-4グリッド、第13号土坑がT-4グリッドに位置し、第1号土坑は第9号住居跡と重複して検出された。土器は3基とも深鉢が転用され第1号土坑では胴下半部を欠く深鉢が逆位に、第8・13号土坑では胴部上半を欠く深鉢が第8号土坑では正位に、第13号土坑では斜位に置かれていた。なおこれら3基の性格については第1号土坑が墓坑、第8・13号土坑が住居施設（住居埋甕）^(註2) の可能性を想定しておきたい。

土坑・ピットは時期確定に欠くものが多いが、調査区中央部と西側及び北側に分布するも

のがみられる。なかでも北側に分布する一群は、住居分布に沿うようにその内外に分布する傾向がみられS・T-8・9グリッド付近では一部住居間に偏在的に集中する個所がある。これら一群は土坑形態が平面・断面とも類似するなどの特徴から墓穴の可能性が想定され、構築時期は土坑覆土内にE3式土器片が多く認められること、また周辺に該期の住居が近接して分布していることなどから大半が中期後半加曾利E3式期(12b期)の時期の所産とみて大過ないものと思われる。ちなみに大珠を伴う第11号土坑はその南西側に単独で検出されている。一方調査区中央および西側、南東側に分布する一群は、第13号土坑周辺に一部偏在的に分布する一群がみられるが、それ以外はとくに特徴的な分布は確認されず、貯蔵穴と思われる第38号土坑(12c期)を除くと性格が判然としないものが多い。中期以外の土坑としては、第8号住居跡床面で検出された早期前半、撚糸文系土器の時期と思われる第23号土坑が特筆される。本遺構は覆土中に早期前半の撚糸文系土器のみ出土することから該期に位置づけたが、近接して位置する第20号土坑や第22号土坑でも早期の遺物が出土しており、これら2土坑を含め中期土坑とした土坑の中に早期の土坑の混在も考慮する必要があるだろう。

遺物は遺構内外から約8000点出土しているが遺構内出土遺物を除くとその大半が耕作による攪乱からの出土で遺構と直接関係する遺物は極僅かである。出土した土器は早期・前期・中期・後期に亘るが量的には中期後半加曾利E式土器が卓越している。ただ加曾利E式の中でも偏りがみられ、加曾利E2式中頃(11b期)の土器と加曾利E3式の古い段階(12a期)の土器の出土が極端に少なく、加曾利E3式中頃(12b期)に集中する傾向がみられた。こうした土器の出土分布傾向は本地区における該期土地利用の実態を直接反映しているものと思われ、本地区では連弧文系土器の出現期に当たる加曾利E2式中頃(11b期)と加曾利E3式の古い段階(12a期)の土地利用は極めて貧弱であった可能性が高い。

3. 古墳時代

古墳時代の調査では第2次調査で住居跡5軒、第6次調査で住居跡1軒が検出された。2次調査で検出された5軒はいずれも小形で、住居形状は第2号住居跡が胴張り気味の隅丸方形、第3・4号住居跡が隅丸方形、第5・6号住居跡が隅丸長方形を呈し、規模は第2・3号住居跡が一辺3.4~3.5m、第4号住居跡が一辺4m前後、第5・6号住居跡が4×3.5m前後を測る。主軸方位は第2号住居跡がN-52°-W、第3・4号住居跡がほぼ同方向でN-45°-E前後、第5号住居跡がN-16°-W、第6号住居跡がN-40°-Wを指す。炉は5軒とも地床炉で、炉の位置はともに主軸線上の奥壁寄りに位置し、第2・4号住居跡が主軸線上奥壁寄り、第3・5・6号住居跡は主軸線上には乗らず、第5・6号住居跡は東側に偏り、第3号住居跡は北東側に偏って位置している。貯蔵穴は第2号住居跡を除き各住居跡から検出されている。貯蔵穴の位置は出入り口の右側に限られ、第3・6号住居跡はピットのみ掘り込まれ、第4・5号住居跡は掘り込みの前面に6cm前後の凸堤を有し第5号住居跡は床面側、第4号住居跡は壁面に接し掘り込まれている。周溝は5軒とも検出されず、支柱穴も全く検出されなかった。出入り口施設に伴うと思われるピットは第4号住居跡のみ認められ主軸線上右側寄りに配されている。

遺物は総量336点出土している。内訳は壺形土器106点、甕形土器216点、高坏形土器7点、

鉢形土器5点、土製品1点、手捏土器1点である。甕形土器は全て台付甕で構成され、第81図1を除くと「く」の字状に屈曲する頸部を有し、口唇部にはキザミが施されている。甕形土器は大・中が認められ（第77図4・3）、胴部の球形化が著しいものもある（第74図2・77図2）。外面の調整はハケとナデがみられるがナデが主流で第81図2は口縁部・胴部外面ともすべてナデによる調整が施されている。高坏形土器は呈示したものが全てで第2・4・5・6号住居跡から出土している。なかでも元屋敷系高坏（第77図5）の出土は編年上の画期の上でも注目される。以上の土器は、今回小型器台の出土は確認されていないが概ね比田井氏編年^(註3)の古墳時代前期Ⅰ段階新相に比定できると思われる。

一方第6次調査で検出された第26号住居跡は一辺4.6m前後の隅丸正方形の住居跡で、第2次調査で検出された該期住居と比較し規模がやや拡大し住居形状も直線化する。炉は地床炉で床面中央やや奥壁寄りに位置し、主軸線上南側に出入り口施設と思われるピット1基を有している。支柱穴は検出されておらず、貯蔵穴のみ南東側に確認された。遺物は壺形土器、埴形土器、器台形土器、甕形土器、台付甕形土器が出土している。これらの土器の時期別様相は、無文の複合口縁壺・埴形土器、平底の甕形土器の登場から古墳時代前期Ⅱ段階^(註3)に比定できると思われる。ちなみに本段階の住居跡は第5次調査（鈴木2004）でも1軒検出されている。

以上の調査結果と第5次調査の調査成果をもとに遺跡を俯瞰してみると、本遺跡西側には古墳時代前期Ⅰ段階新相の集落が、東側には古墳時代前期Ⅱ段階の集落が広く展開しているものと思われる。
(前田秀則)

註1 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 『シンポジウム縄文集落研究の新地平』3 縄文集落研究グループセツルメント研究会

註2 宇佐美哲也 1998 「加曾利E3（新）式期における居住痕跡の一樣相－原山地区第1地点仮称「加曾利E3面」想定住居の検討－ 『シンポジウム縄文集落研究の新地平』2 縄文集落研究グループ

註3 比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』 雄山閣出版

【引用・参考文献】

谷井 彪他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要 1982』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

土井義夫 1985 「縄文時代集落論の原則的問題－集落遺跡の二つのあり方をめぐって－」『東京考古』3 東京考古談話会

原田昌幸 1991 『撚糸文系土器様式』 考古学ライブラリー61 ニュー・サイエンス社

山本孝司 1993 「神奈川県における加曾利E式の変遷について－神奈川編年案の再検討より－」『神奈川考古』29 神奈川考古同人会

黒尾和久 1995 「縄文時代中期集落の基礎的研究（Ⅰ）－時間軸の設定とその考え方について－」論集宇津木台1 宇津木台地区考古学研究会

谷井 彪・細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』2 日本考古学協会

山形真理子 1996・97 「曾利利式土器の研究－内的展開と外的交渉の歴史－（上）（下）」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』14・15

- 小葉一夫 1997 『『住居形式』設定のための基礎的作業－多摩丘陵・武蔵野台地の縄文中期炉跡の分析から－』『東京考古』15 東京考古談話会
- 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究－加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性－」『研究紀要』1
3 埼玉県埋蔵文化財事業団
- 比田井克仁 1997 『土器が語る－関東古墳時代の黎明－』古墳時代土器研究会
- 宇佐美哲也 1998 「加曾利E3(新)式期における居住痕跡の一樣相－原山地区第1地点仮称「加曾利E3面」想定住居の検討－」『シンポジウム縄文集落研究の新地平』2 縄文集落研究グループ
- 比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3』－勝坂から曾利へ－発表要旨・資料集』縄文集落研究グループセツルメント研究会
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 細田 勝 2008 「加曾利E式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 永瀬史人 2008 「連弧文土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 小林謙一 2008 「縄文土器の年代」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 小林謙一 2009 「竪穴住居のライフサイクル」『縄文時代の考古学』8 同成社
- 黒尾和久 2009 「集落遺跡の形成過程－「環状集落跡」の形成プロセス」『縄文時代の考古学』8 同成社
- 安孫子昭二 2011 「縄文中期集落の景観」【未完成考古学叢書】⑨ アム・プロモーション
- 大内千年・建石 徹他 2011 〈特集〉「房総半島および周辺地域における大木諸型式(7b式～8b式)の研究」『下総考古学』22 下総考古学研究会
- 練馬区教育委員会 2011 『武蔵野台地の縄文遺跡』練馬区教育委員会事務局 生涯学習部生涯学習課文化財係
- 和光市 1981 『和光市史 資料編一』和光市史編さん室
- 吉田格・新藤康夫 1982 『神谷原Ⅱ』八王子市柵田遺跡調査会
- 佐々木克典・三木勉 1988 『南八王子地区遺跡調査報告4』「滑坂遺跡」八王子市南部地区遺跡調査会
- 黒尾和久他 1993 『はらやま』調布市原山遺跡調査会
- 肥沼正和他 1994 『岡・向山遺跡』埼玉県朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会
- 板橋区 1995 『板橋区市一資料編1 考古』板橋区市編さん調査会
- 前田秀則他 1997 『木曾森野遺跡Ⅳ』－旧石器・縄文時代編2－町田木曾森野地区遺跡調査会
- 鈴木一郎 2002 『市内遺跡発掘調査報告書5』－花ノ木遺跡(第5次) 仏ノ木遺跡(第2・3次) 峯前遺跡(第4・5次) 越後山遺跡(第1次)－和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2004 『市内遺跡発掘調査報告書7』－越後山遺跡(第4・5次) 午王山遺跡(第8次)－和光市教育委員会
- 鈴木一郎 2006 『花ノ木遺跡(第7・8次) 越後山遺跡(第3次)』和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 尾形則敏他 2007 『志木市遺跡群15』－西原大塚遺跡第67地点－埼玉県志木市教育委員会
- 佐々木保俊他 2009 『西原大塚遺跡Ⅰ』－西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－埼玉県志木市西原特定土地地区画整理組合・埼玉県志木市遺跡調査会
- 渋江芳浩・黒尾和久他 2010 『前原・大上・北伊奈』－都市計画道路秋3・5・2号伊奈館谷線新設事業に伴う埋蔵文化財調査(2)－あきる野市前原遺跡調査会

1. はじめに

本書、第2次調査で報告した縄文時代の第11号土坑出土大珠は肉眼的な観察では翡翠製であると判断できるものの、資料が優品であることを踏まえると客観的かつ科学的なデータに基づく根拠が望まれるものと考えられる。そこで、埼玉県教育委員会及び公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の協力により、平行ビーム法によるX線回折を実施し、非破壊の鉱物同定を行った。なお、資料を比較するため、従来翡翠製として報告されてきた和光市丸山台遺跡第5号土坑出土の有孔垂飾についても分析することとした。

2. 被検資料について

被検資料は以下の2点である。

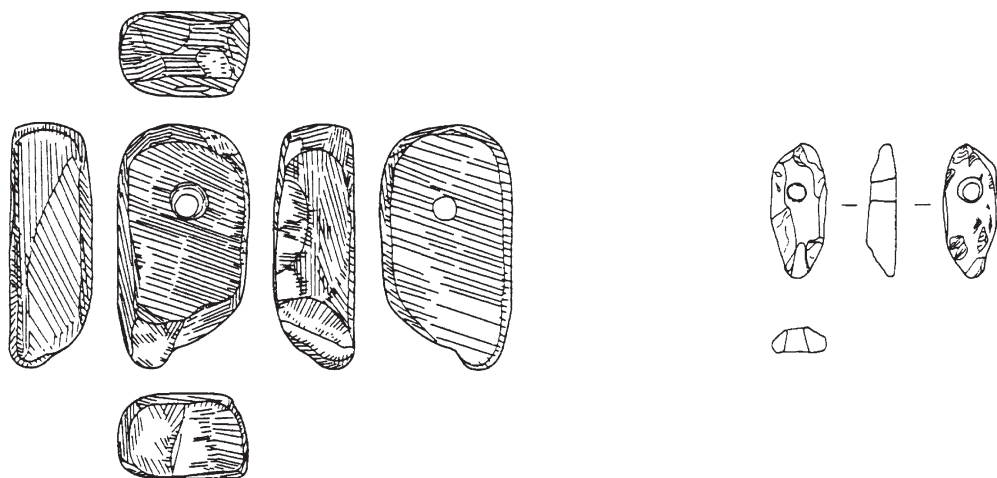
(1) 越後山遺跡第11号土坑出土大珠 (第99図)

越後山遺跡及び大珠の出土概要については、本書Ⅱ4(2)の第11号土坑で報告したとおりである。大珠は長さ4.9cm、幅2.58cm、厚さ1.59cm、重さ44.12gを量る。穿孔は片面側から行われており、透明感のある鮮やかな緑色を呈している。

(2) 丸山台遺跡第5号土坑出土有孔垂飾 (第100図)

丸山台遺跡は和光市丸山台2丁目に所在する。谷中川の浅い谷に面し、標高は32mを測る。昭和63年から平成3年にかけて丸山台土地区画整理事業に伴う事前調査が実施され、主に縄文時代後期の集落跡が確認された。(和光市遺跡調査会・和光市教育委員会 1992、1993)。

有孔垂飾は第5号土坑のA層より検出され、同土坑からは堀之内式期に比定される土器が出土している。本資料は長さ2.7cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重さ2.3gを量り、穿孔は片面側から行われている。色調は緑灰色(7.5GY5/1)であり、一部にやや明るい緑色部が見受けられる。(中岡)



第99図 越後山遺跡第11号土坑出土大珠
実測図 (S=2/3)

第100図 丸山台遺跡第5号土坑出土有孔垂飾
実測図 (S=2/3)

3. 分析操作

機器の設定

X線回折装置は、理学電気製RINT2100ultima+/pcを使用し、分析時には集中法光学系から平行ビーム法の光学系に設定を変更した。

集中法の光学系による測定では、加圧した試料の平面性と位置が重要であるが、平行ビーム法光学系では、集中法光学系に比べれば許容範囲は広い。また試料の持っている面そのままが測定対象となるので、面の選択は可能であるが、研磨などによる表面状態の調整はしていない。従って試料の状況により、同一の材質であっても回折線の強度は異なる。

また、微細な結晶が無秩序な方向性で多量に含まれる岩石では、比較的良好な回折線が得られるが、変成作用や続性作用によって結晶が配向したような岩石を対象とした場合、あるいは比較的大きな少数の単結晶が測定面に存在していた場合には、非破壊での平行ビーム法光学系では、特定の回折線が強調されたり、表れにくかったりする場合がある。

具体的な装置の設定条件を第10表に示した。

第10表 X線回折装置の設定

ターゲット：Cu	モノクロ受光スリット：なし
管電圧：40kV	走査モード：連続
管電流：40mA	サンプリング幅：0.02°
カウンタモノクロメータ：固定	走査範囲：3～90°
カウンタ：シンチレーションカウンタ	積算回数：1回
発散スリット：0.5mm	スキャンスピード：4°/min
発散縦制限スリット：10mm	走査軸 $2\theta/\theta^\circ$
散乱スリット：解放	θ オフセット：なし
受光スリット：解放	光学系：平行ビーム法

4. 結果

試料の分析結果

遺物から得たプロファイルを第101、102図に示した。

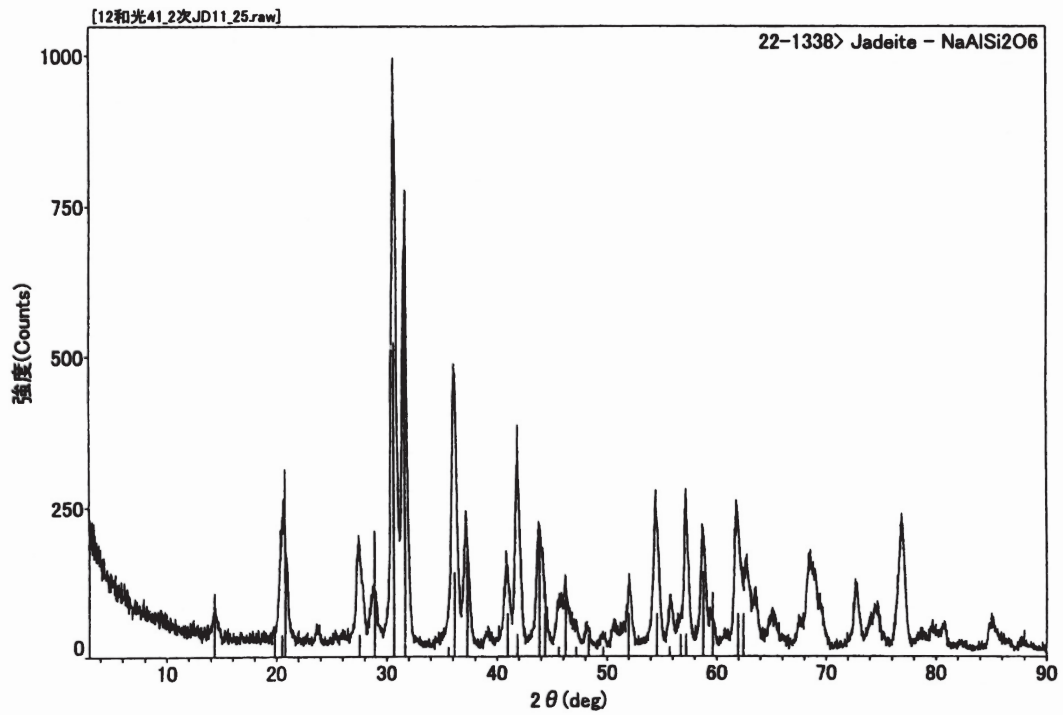
第101、102図では、曲線が今回の試料から得られたプロファイルであり、棒グラフが、データベース上の鉱物データである。

検出されたピークは、翡翠輝石の特徴と一致しており、石製品の材料として用いられた岩石は翡翠と判断してよい。(大屋)

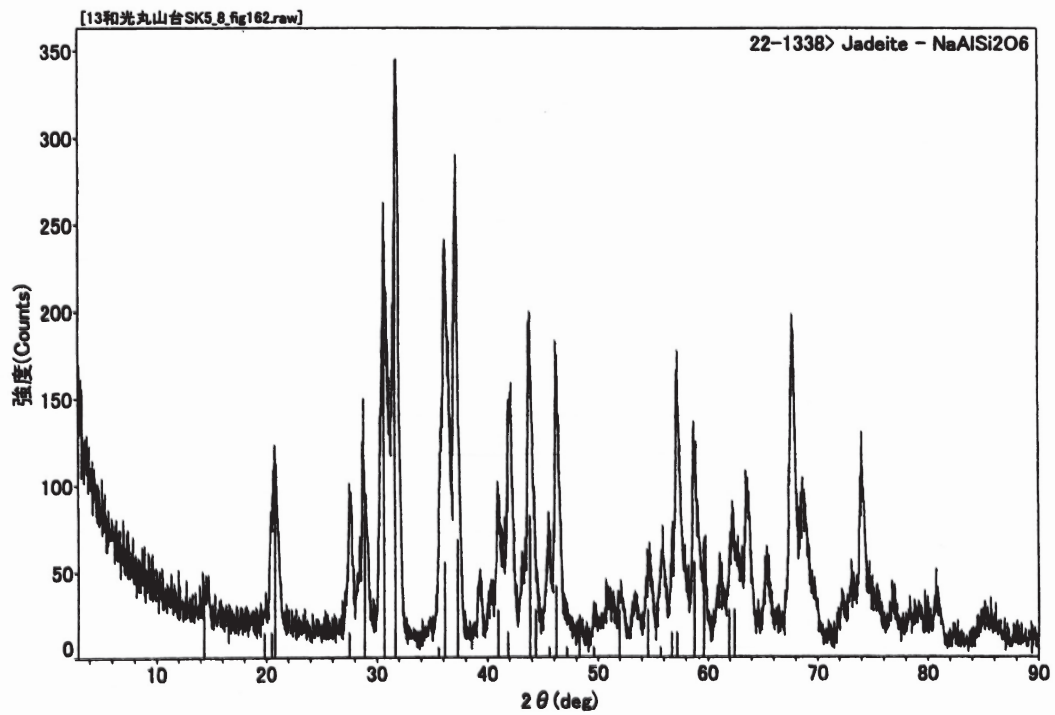
【参考文献】

栗島義明 2002「埼玉県出土の大珠について」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会

清水信也・大屋道則 2005「収蔵石製品の鉱物名の同定(1)」『研究紀要』第20号 財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団



第 101 図 越後山遺跡第 11 号土坑出土大珠分析結果



第 102 図 丸山台遺跡第 5 号土坑出土有孔垂飾分析結果